附錄

幼兒の心理的發達（三）

東京家政大學教授　山下俊郎

三　三歲兒の心理的發達

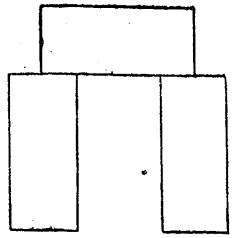
三歲すぎると幼兒は、いよ〳〵學校教育法に定められた幼稚園入園の年齡に達する。この年齡に達すると幼兒の心身の發達は誠にめざましいものがある。實によく活躍する樣になるので、或るアメリカの學者は、三歲兒を稱して何でも「する」"Do" things 子供だと呼んでいる。この三歲兒の心理的發達を前に定めた運動の發達、知的發達、情緒的發達、社會的發達の四つの方面から順次眺めて見よう。

(1)　運動的發達

先ず運動の發達に就いて眺めて見ると、全身的な身體を動かす運動の力の面では、二歲兒に比べて、一段と巧みさを增し、色々の運動が出來るようになつて來ている。その最もいゝ現われは、階段を昇る動作である。二歲兒では、ひとりで階段を昇つたり降りたりするようになつてはいたが、その動作は二歲兒の所で述べたように、片脚が一段昇るともう一方の片脚はこれについてあとから同じ段に昇り、兩脚同じ段に揃えてから、更に次の一段に片脚をふみ出すという式のたよりない昇り方であつた。しかし三歲兒になると、兩脚を交互にふみ出して、丁度大人がするのと同じようにどん〳〵階段を昇つて行く事が出來るようになるのである。それからまた、兩脚をそろえて跳ぶということが出來るようになつて來る。このような所に全身的な運動の力の著しい發達が見られる。

手先きの細かな運動に於ても、三歸兒にはめざましい發達が見られる、「色々の事を實行する子供」という言葉が示すように、手先きをまめに動かし、色々とからだを働かすようになるわけである。その實際の現われを眺めて見る。三歲兒に紙と鉛筆かクレイヨンを與え、大人が圓を描いて見せると、幼兒はこれをまねして描く事が出來る。圓を描くということには、鉛筆なりクレイヨンなりをしつかり握るという

との外に、眼で手先きの運動を見ながら自分の意志によつて運動を圓運動の方向にコントロールするという働きが含まれている。三歳兒の描く圓は、大人や大きい子供達の描くような完全な圓ではない、圓のつぎ目が離れていたり、重なり合つていたりすることが多いが、それでもとにかく圓という形が描けるように、手先きの運動をコントロールするだけの力を持つて來たのである。またこの年齢になると、上の圖のように積木を二本たてゝその上に一本を渡して橋を作つて見せるとこれをまねて同じ形のものを作ることが出來るようになる。この橋を作るということにも、二本の積木を丁度いゝ位置にたてゝもう一本を渡すというところに、目測の力や手先きの運動をコントロールする力が必要とされる。また、この年齢の子供達は、四歳近くなると、正方形を描いたお手本を見せると大體正方形らしい形を描くことが出來るようになる。前の圓を描くときには、描いて見せるとそれをまねして描いたのであるが、今こゝにいう正方形は描いてあるお手本を見せるだけである。お手本を見たゞけで、縱と横の線を結び合せて大體正方形らしい形を描くようになつたのである。



このような言わば、手先きの巧みさの發達は幼兒の日常生活の面にも色々と觀察される。その二三の例を擧げて見よう。三歳すぎた幼兒は食事のときはしを使うことが出來るようになる。幼兒のはしの使い方を見ているといわゆる「握りばし」から始まつて、色々のたよりない持ち方をして使つているが、三歳すぎると、とにかくまがりなりにもはしを持つて食物を口へ運ぶということが出來るようになるのである。わたくしがかつて研究した資料によると三歳すぎれば大部分の幼兒ははしを使うことが出來るようになる。だからわたくしは三歳になつたら食事の際にははしを持たせるように訓練すべきだと考えている。幼稚園でお辨當のとき見ると、三年保育の幼兒達にはさじを使つている子供が隨分見られ、時には二年保育の幼兒達でもさじを使つているのを見受けることがある。保育者の一考を煩わしたいものとわたくしは常々考えている。同じような手先きの巧みさの發達はまたはさみを使うことにも見られる。三歳すぎた幼兒は確實にはさみを使うことが出來る。アメリカの心理學者が作つた標準によると幼兒は二歳十カ月になると、はさみが使えることになつている。外の色々の面の發達に關する資料から考えて日本の幼兒は手先きの巧みさの發達はアメリカの幼兒よりも進んでいるとわたくしは考えているが、アメリカの幼兒が二歳十カ年で使えるのだから、日本の幼兒も三歳になれば使えるはずである。たゞはさみを與えるとけがをするから危いと考えて、家庭の母親達がはさみを使わせないようにしているから使えないのである。この點に就いては幼稚園では、與えるはさみを選擇して、先のとがつていない危くないようなものを與えるようにしているから、早くからはさみを使えるようになる筈

であり、また使わせるようにしたいものである。三歳すぎた幼兒はまたボタンの掛けはずしが出來るようになる。大體三歳から三歳半頃の間に、幼兒は自分の衣類についているボタンに非常に興味を持つて來るようになるので、始終ボタンをいじくりまわしている。ボタンをいじつている間には偶然の機會にそれをはずしたり、また掛けたりすることが起つて來る。ボタンをはずゝことが出來たり、かけることが出來たりすると、幼兒達はこの上もない喜びを現わすものである。このようなことが段々重なつていくと、幼兒達はおそくとも四歳までの間に、即ち三歳臺のうちにボタンの掛けはずしが出來るようになる。但し、こゝに言うボタンは衣類の前についているボタンであつて、脇や後や袖口などについているボタンのかけはずしはこの年齢の幼兒には無理である。

手先きの巧みさだけでなく、手先きの巧みさと足や全身の動きと一緒になつたような運動の面でも三歳兒には一段の發達が見られる。その一つに靴をはくことがある。幼兒の靴には色々の型があるが、短靴で、金具やボタンでパチンと留めるような式のものであれば、三歳すぎた幼兒は充分にひとりではける。いうまでもなく靴をはくということには、手先きの巧みさと手の動きにあわせて足の方も少し動かすという、心理學的用語で言えば協應動作というものを必要とする。靴をはく場合に必要とされる協應動作は、三歳すぎた幼兒には結構出來るのである。但しこの場合、前に述べたような短靴であることが條件であるから、幼兒に自分ではかせるようにする爲には、深い靴やひもで結ぶような靴はなるべく避けるようにしたいものである。手先きの巧みさと全身の平均をとるということを一緒にしたような運動の面では、三歳兒は、コップに水を半分位入れたものを持つて運ぶということが出來るようになつている。コップを持つということだけでなく、水をこぼさないようにする爲には全身のバランスをうまくとりながら歩かないと運ぶことが出來ないわけであるが、三歳すぎた幼兒は、段々にこのようなことが出來るようになるのである。

このように、三歳すぎた幼兒は運動的發達の面ではめざましい發達をする時期にある。日常の保育に當つて、このすばらしい發達の芽の伸びて行くことを充分に助けて行けるように保育者は考えたいものである。

(2) 知的發達

三歳すぎた幼兒は知的なはたらきの面でも、一段と發達する。前に述べた三歳兒の活躍の裏には、この知的發達が一つの大事な背景をなしているのである。

幼兒の描く繪は一歳すぎに始まるなぐり描きが最初のものである。何やらわけのわからないものを描きなぐるのであるが、このなぐり描きが段々繪らしいものにまとまつて行くのは三歳すぎてからである。勿論、出來上つた繪を大人が見ても何の繪だか分らない場合が多い。しかし、大體幼兒の繪というものは、描いている幼兒自身が描くこと自體を樂しむも

のであつて、出來上つた繪を大人が見て價値づけるものではない。三歳すぎた幼兒の繪が繪らしくまとまつて來るというのは、出來上つた繪がまとまつているということではなくて、描く幼兒の心の態度にまとまりが出來て來るのである。それは、三歳以前の幼兒ではたゞ描きなぐるということだけであつたものが、三歳すぎて來ると幼兒自身が描いたものに對して「これ電車」とか「おだんごだよ」などゝ言つて命名をするようになつて來るのである。四歳すぎると大部分の幼兒がこの命名をするようになるが、三歳すぎた幼兒には段々この命名の傾向が出て來るようになる。知的態度の發達である。

また三歳すぎると、假定的な場面を心の中に描き出して考えるということが出來るようになる。例えば、現在御飯を食べたばかりであつて御腹は一杯なのに、「あなたはおなかが空いたときにはどうするの？」と聞いて見ると「御飯たべる」というように、現在自分が實際に直面していない場面を假定的に心の中に描き出して、その場に應じた事柄を考えるということが三歳兒には出來るようになつて來ている。これが三歳以前の幼兒だとそうは行かない。いまおなかが一杯だと、今言つたような質問をされた場合、「おなかすいてないの」と答えてすましている。自分の直面していないことを心の中に描き出すことが出來ないのである。このようなわけで三歳すぎた幼兒は、假定的な場面を心の中に描き出すということが出來るようになつている點で一段と發達して來たのである。

記憶のはたらきでは、二三語からなる短い文章、例えば、「今日はよいお天氣です」「犬はよく走ります」というような文章を、一度讀んで聞かせると、それをそのまゝ覺えていてすべてその通りに言うことが出來る。しかし、記憶の面で三歳すぎた幼兒に見られる著しい發達は、抽象的なことの記憶が出來るようになつたことであるといつてよい。三歳以前の幼兒は、自分で直接見るとか聞くとかしたこと、即ち直接自分の感覺を通して經驗したことでないと記憶していない。しかし、三歳すぎると、このようなことの外に、單に言葉だけで說明されたり言われたりしたこと、即ち抽象的な、自分の直接經驗したのでないことであつても記憶出來るようになつて來るのである。

注意のはたらきも三歳すぎると、やゝ發達する傾向が見られる。もつとも注意といつても、自分で努力して一つの事に注意を集中するということは幼兒には大體無理であるが、自分の好きなこと面白いことには夢中になつて打ち込む。このような注意力は幼兒の場合、好きな遊びにどの位注意を打ち込んで續けられるかという事に、その發達の樣子を見ることが出來る。心理學者の調べたものによると、遊びの持續時間は、二歳兒に比べて三歳兒はおよそ二倍にのびて來る。こゝにこのような注意力の發達の第一段の大きい飛躍が見られるということが出來よう。

幼兒が自分の生活している色々の周圍の事柄に對して理解

を持つて來るということも亦三歳すぎると次第に發達して來るのであるが、その一つに上、下、前、後というような空間關係の理解がある。三歳すぎた幼兒はこのような簡單な空間關係を充分に了解するようになつて來ている。

ものを數えるという數觀念の發達は幼兒の知的發達の一面として、重要視されるものであるが、三歳すぎた幼兒は、既に四つのものを數えることが出來る。こゝに至るまでの準備的發達には、色々の問題があるが、それはさて置き、とにかく四つのものが數えられるようになつている。即ち、四つ並べられたものゝ一つ〳〵に指を置いて、一つ、二つ、三つ、四つという風に數える事が出來る。但し、この場合、全部でいくつあるかと聞いても必ずしも「四つ」という答が出て來るとは限らない。この場合の問題は「數える」という行動が正しく出來ているということであるが、このことが出來るようになると、間もなくみんなで四つということが言えるようになるのは勿論である。この段階にまで進んで來ると幼兒の數える力はどん〳〵滑かに進んで行くようになつて來る。

このように色々の知的なはたらきが發達して來ることを見ると、三歳すぎるとこれ等のはたらきを土臺として、一層進んだ思考力というような面ではどうであろうという事を考えたくなつて來る。勿論、この年齡の幼兒は大人のような頭の中で考える言語的或は抽象的思考というものに於ては難しい。殆んど出來ないと言つていゝであろう。しかし、いわゆる具體的思考を即ち、實際に行動することで考えて行くということは、この年齡の幼兒でも相當のことが出來るようになつている。その一つの現われを見よう。三歳兒は四歳近くになると、自分のせいのとゞかないような高い所にあるものを、踏み臺を使つてとるということを考え實行する力を持つている。家庭などでも、高い所にお菓子をしまつてあるのをいつのまにか踏み臺を持つて來てとるというようなことを、半ば自慢氣に話す母親が非常に多い。これは、三歳から四歳の間の幼兒達の思考力を示す一つのいゝ例であるが、往々にして、五、六歳の子供がこういうことが出來ると言つて、自分の子供が決して馬鹿でないと主張する親にわたくし達は會うことが多い。しかし、これは三歳兒の段階であることを注意しよう。

三歳すぎた幼兒の知的發達の樣子を一通り主なる事柄を例證にひきながら述べて來た。三歳兒はこのようにめざましい發達をとげる時期にいるのであるが、知的發達についても、保育者は、自分の幼兒がどのような段階にいるかということをよく理解し、その理解の基礎の上に、この幼兒達を助け、次の段階へ昇つて行く上に、さわりのないようにしてやつて順調な成長の途をとらせるようにしてやりたいものである。知的な發達の面に於ては、特に教え込む、詰め込むということのみに重點を置いた考え方が從來は强かつたのであるが、これは明かに誤りである。發達の段階に即して、更にのびて行けるような環境と機會とを豐かにしてやることが、發達を助けるという事である事を反省したいと思う。